

しかし蓋を開けてみると、4号機の船出は決して華々しいものではなかった。3号機の裏モノ騒動でパチスロ人気が落ち込んでいたこともあり、4号機初期機種はヒットに至らなかった。初搭載されたリプレイが古参ファンから不評を買い、敬遠されることもしばしばあった。

規制で業界が揺れた後に登場した新基準機が、すぐには受け入れられない——これもまた、後の5号機・6号機登場時に繰り返されるパターンだ。

転機をもたらしたのは、山佐「ニューパルサー」の登場だった。打ち込むほどに新たな発見がある秀逸なリーチ目、愛らしいカエルの絵柄などが受け、パチスロ人気が再び上昇した。

ニューパルサーが支持された理由は、スペックだけではなく、「リーチ目を覚える」という行為そのものが、プレイヤーにとっての楽しみになった。何百通りもあるリール配列のパターンを自分の目で見つけ、覚え、次の来店で確かめる。台とプレイヤーの間に「会話」が生まれたのだ。裏モノが消えた後の空洞を埋めたのは、出玉の荒さではなく、このゲームとしての奥行きだった。

そして決定打となったのが「クランキーコンドル」(1995年)だ。リプレイハズシという技術介入ブームを牽引し、パチスロの遊技人口は一気に増加した。

クランキーコンドルがもたらしたものは、「上手い人が得をする」という新しい体験だった。リプレイをハズせるかどうかで機械割が大きく変わる——つまり腕の差が出玉に直結する。ホールに「上手くなりたい」という動機が生まれ、攻略誌が売れ、スロプロという存在がリアリティを持ち始めた。3号機末期の空洞が、ここで完全に埋まった。

「規制→裏モノ→摘発→人気低迷→新機種で復活」——この一連の流れが、4号機黎明期に凝縮されている。

3号機～4号機黎明期 規制と反動のサイクル

規制強化(1990年・3号機)
集中役の禁止・4.1秒ウェイト導入

ゲーム性が画一化
面白みが失われプレイヤー離れ

裏モノが全国に蔓延
「ノーマルを探す方が難しい」状態

大規模な基板改修・再封印
当局による一掃、人気が急落

4号機登場も低迷(1992年～)
裏モノ騒動の余波で不信感残る

ニューパル・クランキーで大復活
リーチ目・リプレイハズシで人口急増

3号機はわずか2年で終焉

「規制強化↓ゲーム性の画一化↓ユーザー離れ↓低迷↓新機種で復活」という構図は5号機・6号機でも繰り返される

《コラム》リプレイ誕生秘話——規制が生んだ、まさかの武器

パチスロにとって当たり前すぎる存在になったリプレイだが、その誕生の経緯は少し皮肉めいている。

リプレイが搭載されたのは1992年の4号機からで、3号機よりもコイン持ちをよくすることが目的だった。つまり「射幸性を下げるための仕掛け」として生まれた機能だ。メダルが減らないゲームが増えれば、プレイヤーは長く遊べる——規制当局にとっても、業界にとっても都合がいい落としどころだったはずだった。

ところが話はそこで終わらなかった。リプレイが搭載されたということは、「リプレイを意図的に外す」という選択肢が生まれるということでもあった。BIG中にリプレイをあえて揃えずに小役ゲームを延ばす「リプレイハズシ」という技術介入が生まれ、これが後にクランキーコンドルで大ブームとなる。コイン持ちを良くするために作られた機能が、腕のある打ち手にとっては「設定1でも理論上プラスになれる武器」に変わってしまったわけだ。

規制が新しいゲーム性を生み、そのゲーム性がまた新たな規制を呼ぶ——リプレイの誕生は、その最初の教科書的な事例だったのかもしれない。

※本稿に記載の数値等は複数ソースで確認したのですが、集計時期や調査方法により差異が生じる場合があります。参考値としてご覧ください。

【次回予告】第3回：CR革命と果てなき競争～確率インフレが止まらなかった理由～

パチンコ側で起きたCR機ブームがパチスロにどう波及したのか、確率インフレの連鎖を辿る。

スペックの履歴書

～パチスロ規制進化の全記録～

SPEC ARCHIVES...Chronicles of Slot Regulation

～前回の振り返り～

パチスロは1985年の風営法施行で「1号機」として産声を上げ、1988年の2号機でようやく完全確率方式を手に入れた。だが規制とゲーム性の攻防は、ここから本番を迎える。

第2回：最初の鉄槌 ～規制という名の転換点、業界が震えた日～

「ノーマルを探す方が難しかった」——3号機時代を知る古参スロッターが、今でも苦笑いで語る一言だ。この時代に業界を揺るがした裏モノ一掃の動き、それが「最初の鉄槌」だった。

規制が生んだ逆説

Spec Archives

1990年に登場した3号機は、2号機のギャンブル性を抑えた仕様で、集中役に対する規制が強化されていた。ところが、これが予想外の事態を招く。射幸性が抑えられたことで起こってしまったのが、3号機の裏モノ化だった。正規のゲーム性に満足できないプレイヤーの声に応えるべく、全国のホールはこぞって波の荒い裏モノを導入。結果的に「3号機＝裏モノ」といっても過言ではない状況になってしまい、当時を知る人は「ノーマル機を探すことがかなり難しかった」と語る。規制が強まるほど、その抜け穴を求める動きが加速する——この構図は、パチスロ史に繰り返し登場するパターンだ。裏モノへの対

処として、大規模な基板改修や再封印が行われた結果、パチスロ人気は急落した。業界は文字通り、自分たちが掘った穴に落ちた格好だった。ホールの現場はどうだったか。裏モノが撤去された後のシマは、客が戻らなかった。「打つ台がない」ではなく「打ちたい台がない」という状態だ。正規の3号機はあっても、荒い波に慣れたプレイヤーには物足りない。ノーマル機を黙々と打ち続ける客は少なく、稼働が落ちたシマに店員が立ち続ける——そんな光景が全国のホールで広がっていたと言われている。

「最初の鉄槌」とは何だったのか

Spec Archives

第2回のタイトルにある「最初の鉄槌」——それは4号機への移行そのものではなく、3号機時代に業界全体を揺るがした裏モノ一掃の動きを指す。4号機の規格が設けられた当初は、3号機の延長のような形で始まった。つまり4号機の登場自体は「大革命」ではなかった。むしろ3号機末期の違法状態を清算し、仕切り直すための規則改正という側面が強かった。4号機ではセキュリティ面が強化され、さらにはコイン持ちをアップさせる目的でリプレイの追加が義務付けられた。この「リプレイ義務化」は地味に見えて革命的だった。コインが減りにくくなる＝長く遊べるという設計思想の転換であり、現在のパチスロの基礎にもなっている。



3号機：ペガサス412

1991年末～92年頃。「ペガサス412(パル工業)」は、「上乗せver./アニマルver./ダイナマイトver.」といった3種の裏モノとともに世に姿を現した。